
えりまきとかげは、ゆめをみる

みみずく

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

えりまきとかげは、ゆめをみる

【Nコード】

N5074K

【作者名】

みみずく

【あらすじ】

飯田小波は、ある日、えりまきとかげになった。戸惑う彼女を拾ったのは、学級委員の寺本君。同じ屋根の下で暮らし始めた一人と一匹の奇妙な共同生活のお話。

飯田小波の前日

飯田小波がポストを覗くと、珍しく郵便が届いていた。

送り主は、兄の里見であった。

オーストラリアから発送されたエメールの封筒を開けると、小さなプレスレットが出てきた。

木製のプレスレットには、うずまきなどの奇妙な柄が描かれていた。

手紙も入っていたが、無頓着な里見らしく、広告の端をちぎったものに走り書きをしたものだった。

相変わらず、漢字が少ない上に句読点がない文章である。

遠い外国のバーのカウンターで肩肘をついて、ペンを動かす兄の姿を想像した小波は、自然と笑みをこぼしながら、素っ気ない文章を眺めた。

元気か

きのう変なばあさんからおもしろいうでわをもらった

こちらの夜空はすごい星だ

おれはひつようないからお前にやる

ねむれない夜につけると良いことが起きるらしい

気がむいたらつけてみる

夜は、早くねろよ

じゃあな

手紙を読み終えた小波は、ブレスレットを手の上に乗せると、じつくりと観察した。

水色の中に黒いうずまきとオレンジ色の大きい円と小さい円が並べられていた。

これは、いわゆるアボリジニアートではないだろうか。

兄にしては、小洒落た品を送ってきたものだ。

小波は、もらったばかりのブレスレットを腕に通すと、夕飯のミートソースを作り始めた。

小波は、夢を見た。

そこは、夜だった。

とても静かな、静か過ぎるほどの夜だった。

漆黒の闇の中に響く声は、しわがれていた。

しわがれているが、悪意は感じられなかった。

「お前さんは、誰だい。」

小波が名前を名乗ると、しわがれた声は、笑い声に変わった。

「あたしは、若い男にあげたはずだったんだがね。」

しわがれた声には、少し落胆のような響きがあった。

小波は、少し躊躇ってから、闇に話しかけた。

「あなたが、お兄ちゃんにブレスレットあげたおばあさんのの。」

しわがれた声が唸ると同時にどうと風が吹き抜けた。

「お兄ちゃんは、必要ないと言っていたわ。夜空は、星でいっぱいだからって。」

足元が揺れた。

地響きのような笑い声が、小波の体を揺さぶった。

「見込み違いだったか。あたしも老いたものだね。」

何がおかしいのか、地響きと笑い声は、なかなか止まなかった。

ようやく、揺れがおさまった時、小波は、その場に腰を下ろした。

胡坐をかいたのは、どうやら話が長引く予感がしたからだった。

「おばあさんは、お兄ちゃんに何をしてほしかったの。良いことが起きるなんて、嘘でしょ。お兄ちゃんてば、単純だから、すぐ騙されるのよね。」

小波は、胡坐をかいた膝に頬づえをついて、闇を睨んだ。

すると、闇は、身を竦めた・・・ような気がした。

「ドリーミング。」

しわがれた声は、小波の右耳の後ろで囁くように響いた。

返事を聞いた小波は、少々呆れ気味の表情を作った。

「夢なら、誰でも見るでしょう。」

「ちがう。夢を見ることではない。」

闇は、責めるような口調で小波に詰め寄った。

「じゃあ、何よ。」

小波は、うんざりしたようにぼやいた。

明日の朝は、早く起きなければならないのだ。

こんな話に一晩中付き合っていたら、寝坊してしまう。

小波の非協力的な姿勢に危機感を感じたのか、しわがれた声は、渋々口を割った。

「探し物をしているのだ。」

「そうなら、そうと早く言ってよ。探すの手伝うくらいなら、協力してあげてもいいよ。」

とうとう、寝転がる体勢になった小波は、肘で頭を支えながら、気のない声で言った。

「本当か。」

しわがれた声は、明るい調子で響いた。

小波は、片目を開けて、ちらりと闇を見た。

「でも、海外に行くとかいう話だったら、なしだよ。」

「人がいれば、どこでも探すことはできる。」

闇は、嬉しさを抑えきれない声で言った。

小波は、それならいいけどと呟くと寝返りを打った。

「いつから、どうやって、始めるの。」

「その時が来ればわかる。」

「いいかげんだね。」

馬鹿馬鹿しくなった小波は、両眼を閉じた。

寺本久の前日

下駄箱で靴を履き替えていた寺本久は、肩を叩かれた。

「はよっす。」

声を掛けたのは、クラスメイトの立川陽太だった。

「おはよ。」

いつもの朝の挨拶を交わした少年達は、自分達の教室へ向かった。

廊下でかたまる少女達は、おしゃべりをやめて、二人の少年を振り返った。

そんな視線に気がついた久は、少女達に笑いかけた。

途端に悲鳴に似た黄色い声が上がった。

「ったく。王子様は、大変だよな。」

陽太は、呆れ半分妬み半分の視線を爽やかに微笑む少年に向けた。

「そんなことないよ。」

少年は、少し照れたように頬を掻いた。

陽太は、そんな久を見ながら、女子達が陰で久のことを王子と呼んでいることもあながち間違った表現でもないように感じた。

背が高く、すっきりとした面長の顔を持つ少年は、同性の陽太から見ても、美しいと思える整った顔立ちをしていた。

しかも、容姿で目立っている久だが、それを鼻にかけるような性格ではないので、同性からも好かれている。

「顔よし性格よし。それから、」

陽太は、廊下に貼り出してある定期試験の順位表をちらりと見上げた。

確認するまでもないことだが、一番のところには、寺本久と記されていた。

「頭よし。おめでとさん。今回も一位維持だな。」

背中を景気よくバシンと叩かれた久は、順位表を見上げた。

一番端にある自分の名前は、陽太の言う通り、定位置をキープしていた。

ついでに自分の隣にある名前も変わっていない。

「二位は、飯田さんか。」

久の一人言を耳聴く聞きつけた陽太が振り返った。

「飯田って、ぼーとしてるくせに頭いいんだよな。」

陽太は、失礼なことを言いながら、教室に入ってしまった。

廊下に残された久がふと窓の外を見ると、小柄な後ろ姿が目に入ってきた。

栗色のダッフルコートを着た少女は、山積みになったノートを両腕に抱えていた。

少女の軽快な足取りに合わせて、二つのお下げが元気よく跳ねていた。

今時、三つ編みにしている女子中学生なんて、そうそっいない。

鼻歌でも歌っているのだろうか。

ドングリのような丸い頭が、右へ左へとゆらゆら揺れている。

前もろくに見ずに歩いていた少女は、前方から走ってきた男子生徒と見事にぶつかった。

飯田小波は、慌てて、散乱したノートを拾い集めている。

「変な女。」

久の声は、小さな声で呟いた。

家に帰ると、久は、祖母の部屋に呼ばれた。

畳の上に正座をした寺本柚子は、久を見ると、お帰りとも言わず、ただ眉をひそめた。

古風で厳格な性格である柚子は、ことに孫のことになると、さらに融通が利かなくなる。

「久さん。今回の試験だけど、もっと良い点が取れたでしょう。」

「今回は、少し難しかったと思います。」

柚子は、控えめな声で言った久をメガネ越しにじろりと見た。

「言い訳は結構です。あなたは、寺本家の跡取りなのですから、もっと努力してもらわないといけません。」

柚子は、容赦なく言い放った。

「以後、気をつけます。」

久は、小さく頭を下げると、部屋を出た。

自室へ向かいながら、久は、ふと考えた。

たとえば、飯田小波に首位の座を取られたら、あの厳格な祖母は、どんな顔をするだろうか。

しかし、久は、自分の考えを振り払うように首を横に振った。

久は、夢を見た。

そこは、夜だった。

静かな、背筋が寒くなるような夜だった。

何も見えない。

自分は、どこにいるのだろう。

どこへ向かっているのだろう。

久は、怖くなった。

走った。

誰かいないのかと叫んでみた。

泣きだしそうになった時、誰かが耳元で囁いた。

「見つけた。」

柔らかな声にはっと耳を澄ませた。

「こっちよ。怖がらないで。」

温かい手に身を任せた久は、ゆっくりと目を閉じた。

寺本久の前日（後書き）

飯田小波↓いいださざなみ

寺本久↓てらもとひさし

初日

アボリジニにおける「ドリーミング」とは、創世神話の時代や自らの集団が属する祖先の精霊などの思想体系のことである

仰々しい解説を読んだ小波は、思わずふーむと唸った。

たしかに『夢』という意味ではないのは理解できたけれど、夢に出てきた老人がいう『ドリーミング』は、本に書かれている意味とも違う気がした。

試験も終わり、後は冬休みを待つだけの気持ちの良い日だった。

ブルボンのプチケーキをつまみにアボリジニに関する本を読んでみると、クラスメイトの倉田栄美が走り寄ってきた。

「小波は、クラスのクリパに行くよね。」

本から顔を上げた小波は、期待の込められた友人の目から逃げるように体をもぞもぞと動かした。

小波の反応を見た栄美は、小さくため息をついた。

ブルボンのプチケーキがたっぷり詰まった大袋を没収した栄美は、不服そうな小波を睨みつけた。

「お菓子ばかり食べるとニキビができるわよ。」

栄美は、やけに熱のこもった忠告をした後、大袋を自分のかばんの中に入れてしまった。

未練がましくかばんを見つめる小波に顔を寄せた栄美は、内緒話をするみたいに声のトーンを落とした。

「それより、クリパのことよ。今年は、王子も来るらしいわ。同じクラスになれるなんて、私達って、ラッキーよね。」

「私は、担任が五菜先生になったことの方がずっとうれしかったけど。」

学年一お年寄りで優しい教師が二年も連続でクラス担任になつてくれると知った時、小波は、一日チヨコレートを我慢してもいいほど舞い上がったものだ。

ぽつりと告げてみたら、栄美の眉が吊り上がった。

「そういう次元の話じゃないのよ。ここだけの話だけど、王子ったら、ほにゃららアイドル事務所からお声がかかったことがあるのよ。」

小波は、ほにゃらら事務所なんか知らなかったし、自分はもっと重大な秘密を知っている自信があつたので、負けじと大声で反論した。

「ここだけの話だけど、五菜先生だって、歌会始に御呼ばれたこ

とあるんだよ。」

驚くだろうと思ったのに栄美は、きょんとした顔になったただけだった。

「何よ。歌会始つて。」

小波が説明しようとした時、別の誰かの声が答えた。

「年の初めに天皇后両陛下に詠進歌を披露する儀のことだよ。一般で公募された中から選ばれるのは、名誉なことだよ。五菜先生で、英語科の先生なのにすごいね」

寺本久は、説明に加え、賛美の言葉も述べた。

「へえ。寺本くんて、物知り。」

栄美は、高い声で反応すると、尊敬の眼差しで久を見上げた。

そんな栄美を横目で眺めながら、小波は、不貞腐れたように口をすぼめた。

小波だって、五菜先生のことを自慢したかったのに、これでは手柄の横取りではないか。

小波の不穏な目つきに気がついたのか、久は、小波をちらりと見た。

ほんの一瞬だけだったが、久の瞳に愉快そうな感情が映った。

女子の間で王子と呼ばれる寺本久だが、小波は、少し苦手だと思っていた。

『王子』だけに綺麗な顔をしていても親切だけど、ふとした時に小波を見る瞳は、優しさや好意といった類のものからかけ離れた

感情を見つけたのは、いつだっただろうか。

むかつときた小波が顔を逸らせた時、噂の老教師が、教室に顔を覗かせた。

「おい。英語係さん。」

おっとりした声が、小波を呼んだ。

はいつと元気よく返事をする、小柄な老教師へ駆け寄った。

「おや。二組の英語係は、飯田さん一人かい。」

小波が頷くと、五葉教諭は、弱ったなと毛が薄くなった頭を掻いた。

「どうしたんですか。」

「冬休み明けの異文化オリエンテーションのしおりのホチキスどめを頼もうと思ったんだよ。でも、飯田さん一人で、3クラス分は、大変だよな。」

小波が大丈夫だと答えようとした時、五菜教諭は、あっと小さく叫んだ。

「そうだ。学級委員さんにも手伝ってもらおう。ほら、そこにいる寺本君なら、ちょうどいい。」

自分の名前に反応した久が、小波達の方を向いた。

五菜教諭は、こっちこっちと手招きした。

「寺本君、オリエンテーションのしおり作りを手伝ってくれないかな。」

「いいですよ。」

小波は、笑顔で快諾する久の様子をちらりと覗いた。

困っている人を助ける優等生の久だが、そんなことばかりでは疲れるのではないかと思う。

「私なら、大丈夫だよ。今日は、予定もないし。」

一応言ってみたが、久は、にこりと笑っただけだった。

「俺も予定ないから、手伝えるよ。困った時は、お互い様。」

そんな風に言われたら、断るのも失礼だと思った小波は、素直に好意に甘えることにした。

冬は、日が落ちるのが早い。

一心不乱にホチキスどめをしていた小波がふと顔を上げると、窓の外は薄暗くなっていた。

群青、藍、漆黒へと変化していく空を見上げていると、久が顔を上げた。

「疲れたね。大丈夫？」

小波は、気遣うような優しい口調で話しかけてきた久をじっと見つめた。

久の瞳は、黒ではない。

どちらかといえば、藍色に近い。

不思議な色だと小波は思った。

不思議といえば、自分を見る久の瞳に映る感情も不思議だった。

「寺本君で、時々、私を怖い顔で見るよね。」

久は、微笑んだままだったけれど、その目はもう小波を見ていない。

目を合わせたくないのかもしれない。

「ごめん。そんな風に見えた？俺って、目つき悪いのかな。」

「目つきが悪いわけじゃないよ。ただ、目が怯えてる。」

小波は背の高い久に近づくと、下から久の顔を見上げた。

「ちょっと、飯田さん。変なこと言わないでよ。ホントに怖くなるだろう。」

久は、肩をすくめてみせたが、得体のしれない感情が自分の中にむくむくと膨れ上がってくるのを感じた。

それは、恐怖だろうか。

「寺本君。」

小波の小さな手が久の顔に触れそうになった瞬間、それは、久の中で爆発した。

「触るな。」

気がつくと、久は、叫んでいた。

恐怖と苦痛がまじりあつた悲鳴のような声を聞いた時、小波は、体中がゾクゾクと震えるような感覚にとらわれた。

泣きたいような笑いだしたいような感情があふれだした。

ふと、老人の言葉が、よみがえった。

「その時が来ればわかる」

窓もドアも閉じているはずの教室にどうと風が吹いた。

それは、竜巻のようでもあった。

小波を捕まえて、体をぐるぐるのつずまきの中に引きずり込んだ。

風に押されて尻もちをついた久は、ただ呆気にとられていた。

長い時間のようでもあったし、一瞬だけのようでもあった。

気がつくと、風が止んでいた。

竜巻も消えていた。

そこには、お下げ髪の小柄な少女だけが残されているはずだった。

しかし、久が、いくら目を凝らして、クラスメイトの飯田小波の姿は見えなかった。

ただ、飯田小波が立っていた場所に小さな影がちよこんと佇んでいた。

体長50センチほどのそれは、オレンジ色っぽい色合いをしていた。

お世辞にも美しいと言い難い斑模様に覆われた体には、手足の他に長い尻尾もついていた。

顔の半分くらいを占める大きな口は、ぱっくりと割れていた。

トカゲのような体型をしていたが、トカゲと違って、首の周りに傘のようなものを広げていた。

大きな黒い瞳で自分の体を見回していたそれは、久の視線を感じたのか、顔を上げた。

先に口を切ったのは、『彼女』の方だった。

マイペースな『彼女』には珍しく、申し訳なさそうな口調だった。

「ねえ、寺本君。私、何に見える？」

久は、耳を疑った。

目の前の生物は、たしかに飯田小波の声を発したのだ。

頬をつねってみたが、肉の薄い頬は、ひりひりと痛んだだけだった。

久は、もう一度『彼女』を見下ろした。

黒い瞳は、人間と違い、白眼がない。

おかげで何を思っているのかちつとも分からなかったが、少なくともこの状況に面食らっているのは、自分だけではないだろうことは察せられた。

久は、覚悟を決めると、低い声で答えた。

「トカゲのような生物に見える。」

小波は、小さくため息をつくど、私も爬虫類だとは思っていたのよとぼやいた。

「どんなトカゲ？」

「体長50センチくらいで、首の周りに傘みたいなエリのあるトカゲ。」

「エリマキトカゲね。まったく、オーストラリアらしいじゃない。」

二本足で立ったまま、小波は、枝のように細くなった腕を組むと、憤然とした調子で呟いた。

その仕草は、いかにも人間らしかったが、いかんせん『彼女』はエリマキトカゲだったので、久の目には滑稽に映った。

思わず、にやりと笑ってしまった久を小波は苛立たしげに見た。

「ちょっと、寺本君。人ごとだと思って、笑わないで。」

「ごめん。でも、飯田さん、エリマキトカゲになった原因は分かっているの?」

久は、なんとか笑いをかみ殺すと、怒っているらしい小さな飯田小波を見下ろした。

「原因は、なんとなく分かってる。でも、これから、どうすればいいのかはちつとも分からない。どうやったら、人間に戻れるんだろう。」

小波は、小さな体をさらに小さく丸めると、しょんぼりと頂垂れた。

「とりあえず、お家の人に電話して迎えにきてもらったら？トカゲの姿でも話すことはできるみたいだし。」

久の現実的な提案を聞いたエリマキトカゲは、力なく首を横に振った。

「今、一人暮らししているから。」

「中学生なのに一人暮らししているの？」

久は、少し驚いて、小波を見た。

よくある反応なので、小波は、まあねと答えた。

「一人暮らしだったら、エサとか困るね。」

久は、優等生らしく神妙に言った。

「エサとか言わないでよ。私、これでも中身は人間だよ。」

非難の声を上げた小波は、エリを大きく広げると、久を『威嚇』した。

二本足で立ったエリマキトカゲが、エリを広げた姿は、なんとも奇妙だった。

でも、かわいいもんだなと思った久の頭をふいにある考えがよぎった。

それは、飯田小波が人間だったら、思いつきもしない考えだったし、仮に思いついたとしても決して口に出さない考えだった。

しかし、実際、飯田小波は、人間ではなくエリマキトカゲだったし、久は、困っているクラスメイトを助けてあげる親切的な優等生だった。

「飯田さん、もしよかったら、俺の家に来ない？」

外は、群青も藍も飲み込んだ漆黒の闇が広がっていた。

闇が笑ってつぶやいた。

ドリーミングとつぶやいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5074k/>

えりまきとかげは、ゆめをみる

2010年10月9日22時01分発行